

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：31201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370223

研究課題名(和文) 松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成解明の新研究

研究課題名(英文) New research of lords cultural sphere on Waka and Haikai of Matsushiro, Ichinoseki and southern Akita each clan

研究代表者

平林 香織 (Hirabayashi, Kaori)

岩手医科大学・教養教育センター・教授

研究者番号：50300132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：松代藩及び東北諸藩の和歌・俳諧に関して調査研究を行った。第六代松代藩主真田幸弘が柳営歌人遊歌とので行った和歌修練の実態を明らかにした。また、秋田北家五代～七代佐竹義躬義邦・義躬・義文と江戸座俳人谷素外の交流を示す資料を世に問い、地方にあって江戸座俳人と交流しながら点取俳諧を行った文芸活動の一端を明らかにした。さらに、庄内藩第九代藩主酒井忠徳の俳諧と和歌に関する資料の調査研究を行い、堂上家としたしく交遊し、大名・家臣・家族とともに歌や俳諧を詠むことを生涯にわたって習慣的に行っていた実態を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Many daimyos were engaged in Waka and Haikai in Edo. Yukihiro Sanada who was the sixth feudal lord of the Matsushiro clan had trained Waka in his later years. We discovered the actual situation of his study of Waka with Yuka who was one of the high official maid of the ladies' chambers in Edo palace. Moreover we have published some records of Haikai the feudal lords of the Akita-kita clan enjoyed with Sogai Tani who was one of the Haikai teacher lived in Edo. We also investigated the high lifetime activity of Waka and Haikai by Tadaari Sakai who was the ninth feudal lord of the Shonai clan with the aristocracy in Kyoto, other feudal lords, families and his vassals.

研究分野：近世文学

キーワード：大名 和歌 俳諧 地誌 松代藩 庄内藩 秋田藩 南部藩

1. 研究開始当初の背景

大名文芸の研究は、福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』(1937)によって研究の活路が開かれたが、その後目立った研究はほとんどなかった。渡辺憲司『近世大名文芸圏研究』(1996)は和歌に焦点をしばり幾つかの藩の蔵書・新資料について言及し翻刻・分析を進めているが、ごく一部の和歌資料に限られている。俳諧については、熊本藩第八代藩主細川重賢点取俳諧集の翻刻と解説が出水叢書『俳諧集』にあり、テキスト資料としては貴重であるが、点取俳諧に限定した内容で、大名文化圏の問題は今後の課題であった。

一方、各地の大名資料は、主に歴史学者や学芸員によって分類されており、文学的視点からのアプローチはほとんど行われていない。各大家が政治的歴史的活動と同等のものとして文学的活動を熱心に行ってきた経緯を踏まえ、和歌活動や俳諧活動に基づく大名文化圏の実態を究明し、歴史学の成果を国文学的視点で見直す作業が急務であるというのが、研究当初の背景であった。

2. 研究の目的

本研究は、江戸時代の松代藩及び東北諸藩における藩主の和歌活動・俳諧活動を調査研究するものである。大名家では、堂上歌人と強い絆を結び、和歌活動に熱心であったが、その実態の詳細については明らかではない。また、俳諧資料は「雑俳」という名のもとに注目されてこなかった。明和期以降およそ三百諸藩のうち約六分の一の藩主が俳諧活動を行っている。

諸藩の文化圏形成の実体を伝える膨大な和歌・俳諧資料は、各地の博物館や個人が大切に伝来してきている。しかし大半は、未調査のまま埋もれていたり、歴史学の補助資料としてのみ活用されていたりするとどまる。

本研究では、それらの資料を所有者の意向を確認しながら調査させていただきつつ、単なる手すさびではなく、一家をあげての大事業として大名が和歌活動・俳諧活動を展開していたこと解明する。また、これまで各地の資料は単独で、ひとつの大家、あるいはひとりの大名の活動を裏付けるものとしてのみ扱われてきた。それらを相互に関連付け、時代を担うものとして大名文化圏の広がりを明らかにする。そして、藩主の和歌活動・俳諧活動が、諸般及び我が国の思想的、歴史的、政治的、社会的礎であることを立証する。

3. 研究の方法

毎年ひとつの藩を調査対象とした。平成25年度は、松代藩、平成26年度は庄内藩、平成27年度は南部藩である。各藩の文芸資料を伝来・保存している真田宝物館、致道博物館、もりおか歴史文化館及び八戸市立図書館に調査に赴き、研究代表者・分担者・連携研究者による共同討議・シンポジウムを開催

し、研究の進展を図った。また、各自の専門分野に応じて、俳諧・和歌・地誌ごとの研究を進めた。

4. 研究成果

藩ごと、年度ごとの研究成果は以下のとおりである。

松代藩

平成二五年度には、基盤研究(C)「真田文書のアーカイブの構築と松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧の研究」(研究代表・玉城司、平成二二年度～二四年度)より継続している長野市文化財等管理事務所(真田宝物館)所蔵の真田幸弘の点取俳諧集『菊の分根』『菊畠』(全8万句)の翻字・公表を進めた。また、同館所蔵の幸弘の和歌資料の調査を開始した。

平成二五年度は、研究初年度ということもあり、研究打合せ・情報交換・資料調査を兼ねて、九月二日(月)・三日(火)の両日、研究メンバー全員で、真田宝物館及び真田家御用商人八田家を訪問し、和歌資料・俳諧資料・漢籍・絵画資料を閲覧させていただき撮影を行った。撮影させていただいた資料を各自が持ち帰り、それぞれの研究テーマによる調査を開始した。

平成二六年度は、平林、志立、伊藤、稲葉により九月二七日に長野市松代公民館井上敏幸氏による第六代藩主真田幸弘二百回忌記念講演会「名君真田幸弘と俳諧」を聴講し、翌二八日には長野県立図書館所蔵俳諧資料の調査を行った。

平成二五年度から二七年度にかけて、平林、竹中により真田宝物館和歌資料、長野県立図書館俳諧資料、長野県立歴史館飯島文庫和歌・俳諧資料の調査・撮影を行った。

一関藩

平成二四年九月二五日に、平林は、錦仁研究代表による基盤研究(c)「藩主・藩士の和歌活動と名所・歌枕を記す地誌との関係を解明する新研究」(平成二三～二五年度)の研究協力者として、錦、志立とともに、一関市立博物館で下調査を行った。膨大な和歌資料及び歴史文書、書状が伝来するが、その後の南部文書の調査により、一関藩田村家の交流を示す和歌資料がもりおか歴史博物館に伝来することがわかった。詳細な調査及び解析は今後の課題である。

南部藩

平成二五年度には、八戸南部藩については、伊藤が国文学研究資料館機関研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(研究代表者・大高洋司、平成二三～二五年度)により、神作研一氏とともに調査・研究を行った。

平成二五年・二六年度には平林が、もりおか歴史文化館所蔵の南部文書の調査・撮影を行った。

平成二六年度には、左記の研究フォーラム

を開催した。

南部フォーラム 2015 九月二二日(火)～二五(金)

南部藩の文化活動を考える 盛岡・八戸・遠野・大槌における南部氏の活動

盛岡南部藩の文化活動(その1) 九月二二日(火)

資料調査 もりおか歴史文化館

ミニ・シンポジウム 於八戸市新八温泉和室 司会 平林香織

【報告】歴史・和歌・俳諧から考える南部藩文化活動研究の可能性

東北諸藩の歴史認識 志立正知

大名和歌の性格 神作研一

大名俳諧と雪中庵 伊藤善隆

真田幸弘の和歌詠草 竹中 壘

【討論】大名文化圏をミクロとマクロの視点で考える 点印研究と地誌研究の可能性

点印文化の可能性 イコンの形象と継承 稲葉有祐

藩士の地誌編纂が拓くグローバルズム 真島 望

八戸南部藩の文化活動九月二三日(水)

資料調査 八戸市立図書館

史料踏査 八戸市博物館

盛岡南部藩の文化活動(その2) 九月二四日(木)

資料調査 もりおか歴史文化館

資料調査 遠野文化センター

実地調査: 南部藩文化交流における道の文化 九月二五日(金)

南部藩御用商人前川善兵衛関連史跡調査 前川家代々墓所

南部藩外港吉里吉里地区航路安全祈願関連史跡調査 吉祥寺

共催 A 松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成の新研究(代表・平林・平成二五～二七年)

B 東北諸藩における軍記の享受と伝承・歴史認識形成の関連性を解明する新研究(代表・志立・平成二六～二八年)

C 「人を結びつける文化」としての俳諧研究(代表・伊藤・平成二七～三〇年)

秋田藩

平成二五年度から二七年度にかけて、平林、志立、錦、稲葉が、それぞれ複数回にわたり仙北市角館町総合情報センター(図書館)に寄託された鈴木實氏所蔵の秋田藩佐竹北家の和歌資料・俳諧資料の調査・撮影を行った。また同市常光院及び石黒家にも佐竹北家に関する和歌資料・俳諧資料が伝来することを確認した。

平成二五年度には、左記のシンポジウム及び実地踏査を行い、研究成果を公表し、情報交換し、今後の研究の見通しをたてた。

シンポジウム 文学研究の再構築をめざして

第1部 シンポジウム 八月一〇日(土) カレッジプラザ小講義室2

和歌研究の再構築 地域から和歌を考える 錦 仁

軍記・伝説・地誌 秋田藩の歴史構想と真澄 志立正知

地方藩主の俳諧 実態を捉え、研究の意義を拓く 平林香織

『大塔物語』をどう捉え、どう論じ、何をめざすか 佐倉由泰

秋田の民俗 私が探求してきたもの 斎藤壽胤

第2部 実地踏査 八月一日(日)

1 沼館(横手市)歴史の再構築(解説・志立)

2 東里(横手市)歌枕・名所の新構築(解説・錦)

3 雄勝(湯沢市)地元資料の活用と小町伝説(解説・錦)

共催 A 松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成の新研究(代表・平林・平成二五～二七年)

B 「藩主・藩士の和歌活動と名所・歌枕を記す地誌との関係を解明する新研究」(代表・錦・平成二四～二六年)

庄内藩

平成二五年度に、平林、志立、錦、稲葉が、鶴岡市致道博物館、基盤研究(c)「庄内藩主酒井家を中心とした諸大名の和歌・俳諧及び文事に関する研究」(代表上野洋三/鈴木淳・平成一一～一四年)の調査の進捗状況を確認した。致道博物館元副館長故酒井忠治氏が平成二四年に逝去されるまでなさっていた酒井忠徳文芸資料調査・翻字活動の顕彰と、調査の継続が必要であると判断し、致道博物館の意向にそって今後研究を進めて行くための方針について検討した。四名は、それぞれ、鶴岡市立郷土資料館、酒田市光丘文庫の調査も行った。

平成二六年度には、調査・研究の方向性を確認するためのシンポジウムを開催した。七月二六日のシンポジウムに先立ち、庄内藩主歴代の墓所を訪ね、忠徳公及び酒井忠治氏の墓に詣でた。

シンポジウム 七月二五日(金)～二七日(日)

藩主の交遊 和歌・俳諧がむすぶ人と地域

第1部 七月二五日(金) 公益財団法人致道博物館講座室

プレ共同研究会 「近世文学研究の現状と可能性」

藩主の和歌 研究の現状と可能性 錦 仁

藩主の俳諧 研究の現状と可能性 平林香織

点印の研究 研究の現状と可能性 稲葉有祐

庄内藩士の地誌 研究の現状と可能性

真島 望

第2部 七月二六日(土) 致道博物館講座室

シンポジウム 藩主の交遊 和歌・俳諧がむすぶ人と地域 司会・志立正知

基調講演 庄内藩主酒井忠徳の文学活動

出羽国庄内藩主酒井忠徳(凡兆)の俳諧 井上敏幸

研究報告 和歌・俳諧がむすぶ人と地域

庄内藩主酒井忠徳文芸資料の価値 平林香織

八戸藩主南部信房(畔李)の俳諧活動 伊藤善隆

地下から地方へ 神作研一

藩主島津齊宣の文芸活動 丹羽謙治

資料紹介 資料が物語る藩主の交遊関係

酒井忠徳と日野資枝 錦 仁

藩主安藤信友(俳号・冠里)の交遊 稲葉有祐

第3部 七月二七日(日) 庄内藩文化資料実地調査

酒田市光丘文庫、本間美術館、廻船問屋遺稿旧燈屋の調査・見学

1 光丘文庫 案内と解説

2 本間美術館「酒田と江戸の俳諧資料」展案内と解説・伊藤善隆

3 旧燈屋見学 案内と解説・平林香織

以上、三年間精力的に調査・研究を行い、シンポジウムをはじめとして、対話やメールによる情報交換・意見交換を重ねてきた。ようやくおぼろげに、全体像がみえてきたところである。

諸藩の文芸活動は決して単独で行われたものではなく、近世後期(安永~文化年間)の文芸ムーブメントとして全国的に展開したものであることがわかった。藩主は、参勤交代による江戸城詰や江戸藩邸滞在時に諸藩の藩主・藩士及び地下歌人や俳諧宗匠と積極的に交遊し、和歌・俳諧活動を展開していたことは間違いなさそうである。それは単なる文芸活動に終わったものではなく、政治活動に直結したものだ。

世継問題を解消するために縁戚関係を繰り広げ、慶事や季節ごとに他家への表敬や挨拶として和歌や俳諧の贈答が繰り返され、そのたびに人と物と和歌・俳諧が大量に行き来した。そのような交遊関係の中心に、堂上歌人・日野資枝、老中筆頭/白河藩主松平定信、大和郡山藩主・柳沢信鴻、俳諧宗匠・谷素外などがいて、それぞれの中心が描く同心円上に真田家、佐竹北家、酒井家、南部家があり、少しずつずれたり交差したりしながら重なり合っている。また、参勤交代、日光代参、天皇家への使い、領内巡覧などで、藩主は想像以上に動き回っていた。そしてそのたびに、和歌を詠み、ときには連歌俳諧の座を設けていた。藩主は精力的に情報を収集し、歌作・句作に関する記録をさまざまなかたちで残している。堂上家や柳營の歌会や俳諧宗匠・

大名俳人が開催した句会の記録を入手し、自らが主催した歌会・句会の記録も残した。伝書を貸借書写し、和歌・俳諧の指導者との文物のやりとりも頻繁だった。

貴重な大名資料を閲覧させていただきながら、各大家における文芸の律動を実感するなかで、和歌や俳諧は、人と人、大家と大家を物心両面で結びつける紐帯だったことに気づかされた。文学は、個人の心情を吐露したり自己実現の欲求を満たしたりするためのものという以上に、公的な意味をもっていた。和歌を詠むこと、俳諧の一座をとにもする行為そのものが、仁政のための藩主・藩士の鍛錬として重要な意味をもち、和歌や俳諧を介してやわらかく深く他家とつながることが、政治と社会に寿ぎと安定をもたらしたのではないだろうか。その内実の詳細については今後さらに探究を続ける必要がある。

文学を紙に書かれた二次元的なものとして捉えるのではなく、藩と藩をつなげ、日本という国家を形成するための動的で立体的なものとしてとらえ直すべきだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計13件)

平林香織、松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧活動について 安永年間を中心として、松代、26号、2013、1-32

志立正知、藩撰地誌における和歌関連資料の接收 観念的空間の創出、東北諸藩の和歌活動と歌枕・地誌との観k寧を解明する新研究 地誌と和歌・名所・歌枕 J、2014、83-91

伊藤善隆、俳諧文化研究の可能性 俳諧史における芭蕉の位置、比較文化の地平を拓く、2014、81-96

志立正知、近世大名の領国意識 大名文化圏の基盤、文学、16-2.167-180

平林香織、松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心、2016、日本文学会誌、28、1-26

〔学会発表〕(計10件)

平林香織、地方藩主の俳諧 実態を捉え、研究の意義を拓く、シンポジウム文学の再構築を目指して、秋田市カレッジプラザ、2013、8月6日

志立正知、近世的地誌に見る軍記享受の側面、伝承文学会、青山学院大学、2014、9月5日

平林香織、大名の和歌と俳諧 松代藩主真田幸弘、盛岡大学日本文学会平成27年度春季大会、2015、5月30日、盛岡大学

〔図書〕(計5件)

平林香織、誘惑する西鶴 浮世草子をどう読むか、笠間書院、2016、426ページ

錦仁、平林香織、酒井忠治、庄内藩主酒井忠徳に宛てた堂上派歌人たちの書状その他、2016、217ページ

〔産業財産権〕
出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
真田幸弘の文藝（kikutsura.com）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平林 香織（HIRABAYASHI, Kaori）
岩手医科大学・教養教育センター・教授
研究者番号：50300132

(2) 研究分担者

志立 正知（SHIDACHI, Masatomo）
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：70248722

神作 研一（KANSAKU, Kenichi）
国文学研究資料館・教授

伊藤 善隆（ITO, Yoshitaka）
立正大学・文学部・准教授
研究者番号：30287940

(3) 連携研究者

佐藤 洋一（SATO, Yoichi）
岩手医科大学・医学部・教授
研究者番号：40118253